

花鳥風月・俳句

咲き咲きて咲いてこぼれる夏つばき

鴻上 弥生

まかぬのに百日草が咲いている

なすきゆりたくさんとれて食べ切れず

なすきゆうり澤山取れて食進む

時間みて布団を干して気持よく

コーヒーにケーキをそえてお三時か

加藤 イサ子

台風に耐えて稲穂の粒光る

秋近し人それぞれ思う事

夏来たる草草草の友となる

密柑の瑞々しさや墓参り

木漏れ日や輝き増した光る汗

小野 弘幸

郭公も鳴くよ日暮の狭天に

届け先決め成り時の胡瓜摘む

口中になつかしきかなゆすらうめ

山椒の香未だ掌にあり実を摘みて

南京の授粉を少しお手伝い

森本 郁子

怒り増す気候変動梅雨末期

安永 未知満

幼思に七夕の由来教えられ

介護する梅雨の晴れ間の大洗濯

父の日に今年も届くおもいやり

小林 泰子

ムキムキの男を磨く夏来たり

たおやかに咲く姿見や七変化

立葵下から咲くや大形美

玉の汗ぬぐふ力士の眼がきらり

山開きコロナ終息願かける

徳永 誠一

闇深む山津波浮く荒き梅雨

つばめ飛ぶ朝日をあびて低飛行

千の風亡夫の声す合歓の花

塗塀 良子

艶やかに瑠璃色の道あじさいよ

のっそりとたじろぎもせずカタツムリ

梅雨晴間すずめカラスや囀りて

石井 トシ子

木漏れ日や父母の墓に風薫る

紙芝居老いて楽しむ子供の日

金柑に雀集り食い散らす

明星 勲

雨音と棚田がうむや合唱隊

しばざくら人文字もゆる三色で

子の喜々とあいさいの空肩車

父の日やおくりおくられ父かえる

休業が閉店となるコロナ禍で

麦飯の弁当わけ友と食べ

曾我部 福石

息吐いて残暑の影の黒さかな

懐かしき少年の日の星月夜

蝸の沁み込んで来る棚田かな

小田 慶喜

草花に水撒き処暑を語らひぬ

秋口に一步踏み込む散歩道

過去の夢風と語らふ葛の花

小田 和子

老いる今友も命もへるほたる

深き藍清楚な四葩描く我

笹井 久江

雨上がり熟れた李の裂けにけり

うちぬきの水は円やか冷奴

雨ぽつり挽ぎたての枇杷届きけり

越智 和人

青嵐合格しらせ孫笑顔

ラジオよりキャンペの情報流れくる

隣家より風鈴の音届く朝

小野 宮子

青空に崩れし雲や青嵐

風渡り白雲の影行く青田かな

鈴木 伊都美

藤咲くや空家の屋根を一色に

大群の蟻が運や運氣だし

篠原 高代

マスクつけニューノーマルの夏来たる

天空は規則正しく夏至の月

ひと汗拭き肌に吹く風涼しかり

まだ残暑未明にかけそき風ひやり

孟蘭盆や仏間へ番の赤とんぼ

田中 良子

オリ・パラをいまかいまかとまっている

久保 利司